

[研究ノート]

基礎看護技術演習中に看護師役を行っている 学生の視線に関する研究

Study on the line of sight of the students
who are doing the nurse role in basic nursing skills exercises

松島 正起 秋庭 由佳 藤澤 珠織 古橋 洋子
Masaki Matsushima Yuka Akiba Shiori Fujisawa Yoko Furuhashi

青森中央短期大学 看護学科

Aomori Chuo Junior College, Department of Nursing

Key words：看護学生，看護技術演習，観察，視線

I. はじめに

一般に観察とは、物事の様相をありのままにくわしく見極め、そこにある種々の事情を知ることである。ナイチンゲール（2011）は「何のために観察をするのかという視点を見失うようなことは、絶対にあってはならない。観察は雑多な情報や珍しい事実をよせ集めるためにするものではない」と述べている。このように、観察には人の認識というプロセスが含まれ、観察とは知覚して見えていることではなく、認識して見ていることである。また、ベナー（2006）は、「看護師は患者の状態変化を察知する要素のみならず、熟練し記録をつける能力や医師を説得できるような説明報告をする能力を必要としている」と述べている。看護において、観察はケアの質を左右する重要な行為である。学生は基礎看護学実習で、初めて患者と関わり看護のプロセスを学ぶ。そして、患者をケアする際、患者の生活・健康状況を観察して患者を理解し、患者の立場で問題点を見極め、ケアを提供し、その結果を評価する。日常生活の援助をする場面は、患者の動作や全身状態などを観察する機会であるが、学生は対象を理解することよりも、自分自身の技術や手技に意識が向いている様子が伺えた。長谷川ら（2013）の調査では、看護学生1年生の半数以上が、一年次終了時になり看護からイメージする言葉として「観察」をあげると報告している。言い換えれば、観察の重要性は、基礎看護学を学び始める1年初期には意識されにくい。また、齋藤ら（2010）が新人看護師と経験者を比較し「観察項目と順番は新人も経験者も同じであるが、新人は問題の原因と関連性について論理的に考えることが未熟である」と述べているように、観察は看護師として就職したあとも訓練が必要である。

基礎看護援助論Ⅲ（基礎看護技術）において、学生は日常生活の援助技術を看護師役と患者役に分かれた演習を通して学ぶ。そこで、今年度は観察力の向上をめざし、演習で援助をした際の患者の主観的情報と客観的情報のアセスメントを記載することを義務付けた。その内容から看護の初学者であ

る学生が援助をする際、どこに視線が集中するか現状を知ることが必要と考えた。対象者を目の前にして看護ケアを実施する学生の視線とその変化を明らかにすることは、基礎教育初期の段階から観察する能力を身につける育成プログラムにつながる基礎資料となり得るものである。

Ⅱ. 研究目的

基礎看護技術演習中において、看護師役を行っている学生の視線の先が、授業進度に伴いどのように変化するかを明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究期間：2013年11月～2013年12月

2. 研究場所：青森中央短期大学

3. 研究対象

看護学科8期生85名中、研究に同意した学生58名。基礎看護援助論Ⅲの演習（6回）において記載した演習記録のうち、学生が客観的情報として記載した部分。

表1. 授業進度に伴う演習内容

回	演習内容
1	バイタルサイン測定
2	バイタルサイン測定・冷電法
3	清拭
4	洗髪・足浴
5	食事介助
6	オムツ交換

4. 研究方法

1) データ収集方法

- ① 基礎看護援助論Ⅲの演習（6回）において、看護師役で看護ケアを実施した際の記録として、主観的情報、客観的情報、それらに関するアセスメントを学生に記載を義務付けた。
- ② 研究協力に同意を得た学生から記録を回収し、主観的情報、客観的情報、アセスメントを演習内容毎に学生別の一覧表を作成し整理した。一覧表を作成する際、学籍番号と関係のない通し番号を使用した。

2) データ分析方法

- ① 学生が客観的情報として記録した内容を援助中の視線として意味のある文節に区切って抜き出し要素とし、授業進度の演習内容毎に学生別に整理した。
- ② 抜き出した要素を比較検討し、類似したものにラベル名をつけコード化した。
- ③ ②でコード化したものを比較検討しながら身体部位を参考に部位を抽出した。
- ④ ③で抽出した部位を比較検討しながら、カテゴリーに分類した。
- ⑤ ②③④の作業を演習内容毎に繰り返し、その際、前の演習内容の分析から抽出したコード、部位、カテゴリーと比較検討しながら実施した。

- ⑥ 一連の作業は、演習記録に戻りながら、比較して実施した。また、分析過程において、特にコード化したものから部位を抽出する段階、カテゴリーに分類する段階では、質的研究の経験が豊富な共同研究者と検討を繰り返しながら行った。

3) 倫理的配慮

本研究は、研究活動推進委員会による倫理審査を経て実施した。

対象学生に対しては、本研究の目的と内容、自由意志による参加、拒否や途中中断する権利、研究参加の可否が成績に影響しないこと、プライバシーの保護について口頭と文書をもって説明し、演習記録を使用する許可を得た。研究の了解に関しては、文書の提出をもって同意とした。演習記録に記載されている個人情報の保護・匿名性を保持するため、データを取り扱う際には学籍番号と関係のない数字を使用した。研究中のデータは研究者が厳重に保管し、終了後はシュレッダーにかけ、本研究以外には使用しない。

IV. 結果

1. 学生の視線

学生58名が基礎看護技術演習（6回）において記載した演習記録（全348部）の中から、学生が客観的情報として記載した内容から視線として、計792個（バイタルサイン：154、冷罨法：191、清拭：108、洗髪71、足浴：53、食事介助：103、おむつ交換：112）の要素を抽出した。これらの要素は111個にコード化され、58ヶ所の部位・物品に分類され、さらに9カテゴリー【顔】【上肢】【全身】【陰部臀部】【下肢】【頭頸部】【体幹】【値】【物品】に分類された（表2）。以下、カテゴリーを【 】, 部位を〔 〕、ラベルを〈 〉で示す。

カテゴリー【顔】には、部位として〔顔〕〔口〕〔目〕〔頬〕〔眉間〕〔歯〕〔口唇〕が含まれた。【上肢】には、部位として〔手〕〔腋窩〕〔上肢〕〔手首〕〔指〕〔前腕〕〔上腕〕〔手掌〕が含まれた。以下、【全身】には〔全身〕〔皮膚〕、【陰部臀部】には〔便〕〔陰部〕〔臀部〕〔尿〕〔鼠径部〕、【下肢】には〔足〕〔足指〕〔踵〕〔足爪〕〔足首〕、【頭頸部】には〔髪〕〔頭皮〕〔頭部〕〔喉仏〕〔頸部〕、【体幹】には〔胸〕〔腰〕〔腹〕、【値】には〔体温〕〔脈拍数〕〔呼吸数〕〔血圧〕、【物品】には〔タオル〕〔水銀柱〕〔マンシエット〕〔湯〕〔体温計〕〔おむつ〕〔時計〕〔氷枕〕〔ベッド〕〔泡〕〔食物〕〔寝具〕〔スプーン〕〔寝衣〕〔バスタオル〕〔血圧計〕〔送気球〕〔聴診器〕〔洗髪車〕が含まれた。

表2 援助中の学生の視線

カテゴリー	個	部位	ラベル	個		
顔	231	顔	177 顔がほてっていた	57		
			気持ちよさそう	44		
			顔色が良い	34		
			顔をしかめている	24		
			額に発汗あり	9		
			顔を横に向けた	5		
			意識はハッキリしてる	3		
			顔が温かい	1		
		口	25 食べにくそう	10		
			ずっと嚙んでいた	9		
		目	口を少ししか開かない	6		
			目を閉じていた	8		
			目がうつろ	4		
		頬	一点を見つめている	3		
			頬が赤かった	5		
		眉間	5 眉間にしわを寄せていた	5		
		歯	3 前歯が治療したあと	3		
		口唇	1 口の色は良かった	1		
上肢	130	手	54 手に触れると熱い	28		
			箸で米をつかめていない	17		
			テーブル上の様子が分からない	8		
			手が湿っていた	1		
		腋窩	20 腋に汗をかいていた	20		
			熱っぽい	7		
		上肢	腕を袖から抜きにくい	7		
			腕まくりしたまま	1		
		手首	13 脈に触れた	9		
			手首に触れると熱っぽい	4		
		指	12 指先が温かい	12		
		前腕	11 血管が浮き出て赤くなった	5		
			腕が温かい	5		
		上腕	腕が汗ばんでいた	1		
			3 上腕動脈を探すのが難しい	3		
		手掌	2 腕と掌の色が違った	2		
		全身	84	全身	58 ぐったりしていた	30
					くすぐったがっていた	11
患者が動いてしまった	9					
落ち着いている	5					
体の位置が下のほう	3					
皮膚	26 体に触れたら熱かった			8		
	肌が赤くなっていた			8		
	汗をかいていた			6		
	皮膚の感じ			2		
	拭くだけでむくみがとれた			2		
陰部臀部	57			便	41 排便あり	20
					便の色は茶褐色	11
					便がコロコロ	7
					硬いひび割れがある便	3
				陰部	10 陰部の皮膚に異常なし	8
					露出の時間	2
				臀部	3 臀部が濡れていた	2
					肛門に便がついている	1
尿	2 尿: 正常	2				
鼠径部	1 鼠径部にオムツが食い込んでいる	1				

カテゴリー	個	部位	ラベル	個			
下肢	56	足	34 靴下のあとがついていた	12			
			足が温かい	10			
			足の血色も良い	10			
			足がさらさらした	2			
		足指	9 足先が温かい	6			
			足の指の間が汚れていた	3			
		踵	5 かかとに乾燥あり	5			
			爪の色がピンク	3			
		足爪	5 足の爪が伸びていた	2			
			足首の表面温度低い	2			
		足首	足首の血色不良	1			
			髪	20 髪がべとべとしている	16		
			髪	20 しっかり濡れない	3		
		頭頸部	44	髪	悪臭が生じている	1	
					頭皮	9 白い頭皮	5
					頭皮に皮脂	4	
				頭部	8 頭が熱い	5	
					ベルトから頭がずれた	2	
頭痛あり	1						
喉仏	5 飲み込むとのどが動いた	5					
	頭部	2 首に発汗あり	1				
	首に触れると熱い	1					
体幹	24	胸	20 呼吸が早い	7			
			R15回	6			
			胸元が汚れていた	4			
		腰	呼吸が浅い	3			
			腰を上げる時ぎこちない	3			
腹	1 腸の走行	1					
値	51	体温	31 体温が高い	31			
			脈拍数	14 脈拍が早い	14		
		呼吸数	4 呼吸の数が少ない	4			
		血圧	2 低血圧気味	2			
		物品	115	タオル	16 タオルの温度が熱い	10	
タオルは常に密着させて拭く	6						
水銀柱	12 Bp110/60			1			
マンシエット	12 音を聞きとれない			11			
湯	12 マンシエットを適度な強さで巻く			12			
湯	11 湯の温度が少しぬるかった			10			
湯	湯が患者さんのほうに飛んだ			1			
体温計	9 T36.9℃			7			
体温計	9 体温計の角度			2			
おむつ	8 オムツがずれていた			8			
時計	6 脈のリズムが不規則			3			
氷枕	5 P56回			3			
枕	5 枕の高さ			5			
ベッド	5 ベッドの高さが合っていない			5			
泡	5 前髪に泡がなかった			5			
食物	5 汁が少しこぼれた			5			
寝具	4 布団を顔までかけていた			4			
スプーン	4 スプーン一杯にすくった			4			
寝衣	4 寝具が汚れてぐちゃぐちゃ	3					
腕まくり	1 腕まくりをしている	1					
バスタオル	3 常にバスタオルを利用	3					
血圧計	2 血圧計の位置が不安定	2					
送気球	2 送気球は利き手で持つ	2					
聴診器	1 聴診器はポケットに入れる	1					
洗髪車	1 洗髪車に泡がたまっまま	1					

2. 演習内容別の視線（表3）（図1）

1) バイタルサイン

【顔】への視線が42要素（27.3%）と最も多く、次いで【物品】が36要素（23.4%）【上肢】が30要素（19.5%）であった。【顔】【上肢】に46.8%の視線が集中し、特に、〔顔〕〔上肢〕〔手首〕〔手〕に集中していた。〈気持ち良さそう〉〈顔色が良い〉など〔顔〕全体から表情や色を見ていた。上肢では〈熱っぽい〉〈手に触れると熱い〉〈脈に触れた〉など皮膚に触れ、〔上肢〕〔手首〕〔手〕を見ていた。また、【物品】への視線では、〈音を聞き取れない〉〈マンシエットを適度な強さで巻く〉など血圧計の〔水銀柱〕〔マンシエット〕を見ていた。

表3 演習内容別の視線の部位

演習内容 部位	合計 個 %	バイタルサイン 個 %	冷電法 個 %	清拭 個 %	洗髪 個 %	足浴 個 %	食事介助 個 %	おむつ交換 個 %
顔	231 (29.2)	42 (27.3)	57 (29.8)	36 (33.3)	15 (21.1)	2 (3.8)	51 (49.5)	28 (25.0)
上肢	130 (16.4)	30 (19.5)	58 (30.4)	10 (9.3)	2 (2.8)		26 (25.2)	4 (3.6)
全身	84 (10.6)	21 (13.6)	13 (6.8)	27 (25.0)	3 (4.2)	3 (5.7)	9 (8.7)	8 (7.1)
陰部臀部	57 (7.2)							57 (50.9)
下肢	56 (7.1)		7 (3.7)	4 (3.7)		45 (84.9)		
頭頸部	44 (5.6)		8 (4.2)		31 (43.7)		5 (4.9)	
体幹	24 (3.0)	6 (3.9)	6 (3.1)	5 (4.6)	2 (2.8)	1 (1.9)	1 (1.0)	3 (2.7)
値	51 (6.4)	19 (12.3)	29 (15.2)			2 (3.8)		1 (0.9)
物品	115 (14.5)	36 (23.4)	13 (6.8)	26 (24.1)	18 (25.4)		11 (10.7)	11 (9.8)
合計	792 (100)	154 (100)	191 (100)	108 (100)	71 (100)	53 (100)	103 (100)	112 (100)

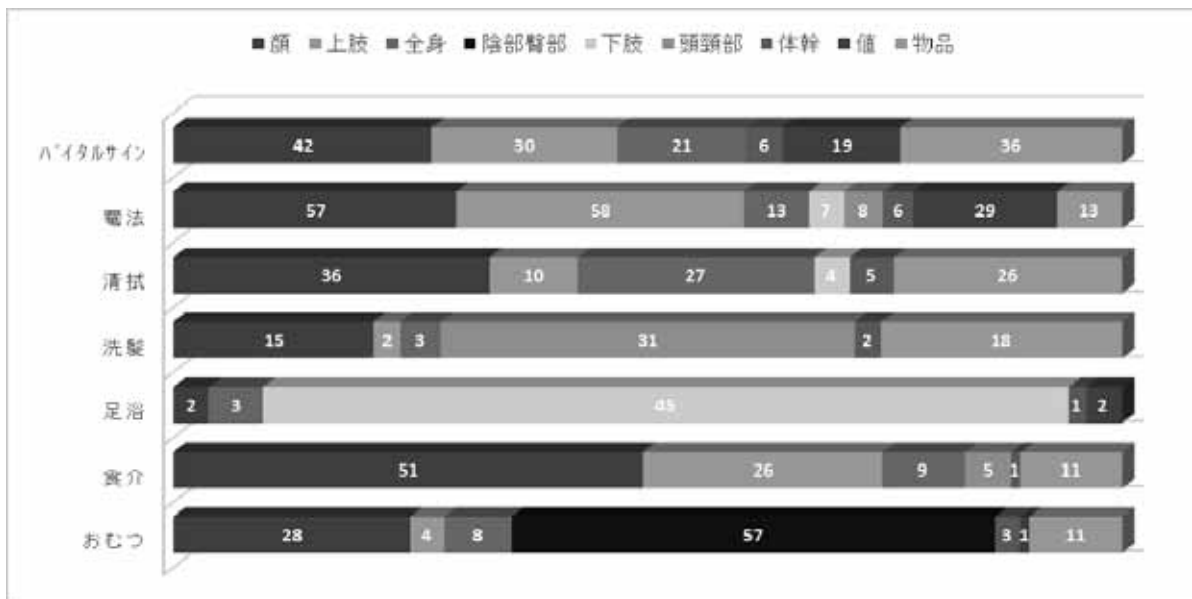


図1 演習内容別の視線の部位

2) 冷電法

【上肢】が58要素（30.4%）と最も多く、次いで【顔】が57要素（29.8%）であった。【上肢】【顔】に60.2%の視線が集中し、特に〔腋窩〕〔手〕〔顔〕に集中していた。〔顔〕全体から〈顔色が良い〉〈顔がほてっていた〉など顔色を見ていた。そして、〈手に触れると熱い〉〈指先が温かい〉〈腋に汗をかいていた〉など皮膚に触れ、〔腋窩〕〔手〕を見ていた。また、【物品】への視線は13要素（6.0%）で、〔氷枕〕が5要素と最も多かった。

3) 清拭

【顔】が36要素（33.3%）と最も多く、次いで【全身】が27要素（25.0%）、【物品】が26要素（24.1%）であった。【顔】【全身】に58.3%の視線が集中し、特に〔顔〕〔皮膚〕に集中していた。〔顔〕から〈気持ちよさそう〉〈顔をしかめている〉など表情を見ていた。〈くすぐったがっていた〉など〔全身〕の動きを見て、〈肌が赤くなっていた〉〈汗をかいていた〉など〔皮膚〕に触れ、色を見ていた。また、【物品】に対する視線は26要素（24.1%）で、〈タオルの温度が熱い〉など〔タオル〕の温度を気にしていた。

4) 洗髪

【頭頸部】が31要素（43.7%）と最も多く、次いで【物品】が18要素（25.4%）、【顔】が15要素（21.1%）であった。【頭頸部】【顔】に64.8%の視線が集中し、特に〔髪〕〔顔〕に集中していた。主に〈髪がべとべとしている〉など〔髪〕に触れ、〔顔〕から〈気持ちよさそう〉〈顔がほてっていた〉など表情や顔色を見ていた。また、【物品】への視線では〈湯の温度が少しぬるかった〉〈前髪に泡がなかった〉など〔湯〕の温度を気にして〔泡〕の状態を見ていた。

5) 足浴

【下肢】が45要素（84.9%）と8割を超える視線が集中し、【顔】への視線は2要素（3.8%）であった。〈足の血色も良い〉〈足が温かくなった〉〈靴下のあとがついていた〉など、〔足〕に触れ、色、状態を見ていた。〔足首〕〔踵〕〔足指〕〔足爪〕については大きな差はなかった。また、【物品】についての記述は見られなかった。

6) 食事介助

【顔】が51要素（49.5%）と最も多く、次いで【上肢】が26要素（25.2%）であった。【顔】【上肢】に74.7%の視線が集中し、特に〔口〕〔顔〕〔手〕に集中していた。主に〈食べにくそう〉〈ずっと噛んでいた〉〈顔をしかめている〉など、〔口〕の動きと表情を見ていた。また、〈箸で米をつかめていない〉など〔手〕の動きや動作を見ていた。また、【物品】に対する視線は11要素（10.4%）で、〈汁が少しこぼれた〉〈スプーン一杯にすくった〉など〔食物〕〔スプーン〕を見ていた。

7) おむつ交換

【陰部臀部】が57要素（50.9%）と最も多く、次いで【顔】が28要素（25.0%）であった。【陰部臀部】【顔】に75.9%の視線が集中し、特に〔陰部〕〔便〕〔顔〕に集中していた。〈陰部の皮膚に異常なし〉〈排便あり〉〈便の色は茶褐色〉など、〔陰部〕の皮膚の状態や〔便〕の色、〈顔がほてっていた〉など顔色を見ていた。また、【物品】に対する視線は11要素（9.2%）で、〈オムツがずれていた〉など〔おむつ〕を見ていた。

3. 7つの演習内容に共通する視線

7つの演習から共通して抽出されたカテゴリーは、【顔】（231要素：29.2%）、【全身】（84要素：10.6%）、【体幹】（24要素：3.0%）であった。

1) 【顔】

【顔】への視線では、特に〔顔〕〔口〕〔目〕に集中していた。〔顔〕では〈顔がほてっていた〉〈気持ち良さそう〉など色や表情を見ているほか、〈額に発汗あり〉〈額が温かい〉〈顔を横に向けた〉など、顔に触れ、顔の動きも見ていた。〔口〕では〈食べにくそう〉〈ずっと噛んでいた〉〈口を少ししか開かない〉など口の動きを見ていた。〔目〕では〈目を閉じていた〉〈目がうつろ〉〈一点を見つめている〉など、瞼や目の動きを見ていた。

2) 【全身】

【全身】への視線には〔全身〕と〔皮膚〕が含まれたが、〔全身〕では〈ぐったりしていた〉〈くすぐったがっていた〉など全身から体調や動きを見ていた。その他〈体の位置が下のほう〉など体の位置を見ていた。〔皮膚〕では〈体に触れたら熱かった〉〈汗をかいていた〉〈肌が赤くなっていた〉など、皮膚に触れて温度や湿潤、色を見ていた。

3) 【体幹】

【体幹】への視線では、特に〔胸〕に視線が集中し、〈呼吸が早い〉など胸の動きを見ていた。その他〈胸元が汚れていた〉など、皮膚の汚れを見ていた。

4. 視線の変化について

【顔】について視線の部位の変化を見ても、授業進度に伴い新たに抽出された部位はなかった。食事の演習では、〔口〕に5割程度の視線が集中しているが、他の演習では約8割以上の視線が〔顔〕に集中している。【顔】には部位として〔顔〕〔口〕〔目〕〔頬〕〔眉間〕〔歯〕〔口唇〕の7つが抽出されているが、〔顔〕以外の部位への視線は演習内容によって異なっていた。また、足浴とおむつ交換の演習では、〔顔〕以外の部位は抽出されなかった。

ラベル単位で比較すると、バイタルサインと冷罨法の間で異なり、〔顔〕では〈顔を横に向けた〉〈顔が温かい〉〈額に発汗あり〉、〔目〕では〈一点を見つめている〉のラベルが抽出された。

【物品】への視線では、演習ごとに使用物品が異なるものの〔水銀柱〕〔マンシエット〕〔タオル〕〔湯〕への視線が比較的多かった。また、【物品】への視線の割合を演習別に比較すると、「バイタルサイン」「清拭」「洗髪」の演習では2割程度みられたのに対し、「冷罨法」「食事介助」「おむつ交換」では1割に満たず、足浴では全くみられなかった。

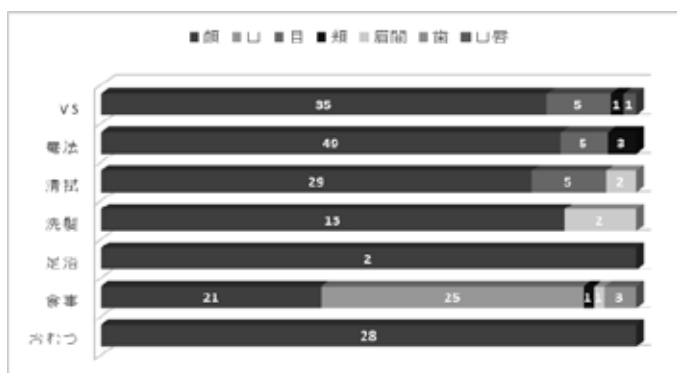


図2 顔への視線における部位の割合

表4 演習内容別にみた【顔】の要素数

部位	個	ラベル	個	VS	罨法	清拭	洗髪	足浴	食介	おむつ
顔	177	顔がほてっていた	57	5	27	3	6	1	3	12
		気持ちよさそう	44	5	7	11	4		8	9
		顔色が良い	34	17	10	3	1		3	
		顔をしかめている	24	5	1	8	1	1	5	3
		額に発汗あり	9		1	2	1		1	4
		顔を横に向けた	5		2	2			1	
		意識はハッキリしてる	3	3						
		顔が温かい	1		1					
口	25	食べにくそう	10						10	
		ずっと嘔んでいた	9						9	
		口を少ししか開かない	6						6	
目	15	目を閉じていた	8	4	2	2				
		目がうつろ	4	1	1	2				
		一点を見つめている	3		2	1				
頬	5	頬が赤かった	5	1	3				1	
眉間	5	眉間にしわを寄せていた	5			2	2		1	
歯	3	前歯が治療したあと	3						3	
口唇	1	口の色は良かった	1	1						
			231	42	57	36	15	2	51	28

V. 考察

1. 演習内容別の視線

いずれの演習においても視線はケアの部位（【上肢】【全身】【頭頸部】【下肢】【顔】【陰部臀部】）と【顔】に集中していた。バイタルサインでは、血圧測定、脈拍測定の際に〔上肢〕〔手首〕〔手〕に視線が集中し、〔冷罨法〕では氷枕を頭部に貼用するため〔顔〕に、体温測定、脈拍測定のため〔腋窩〕〔手〕に視線が集中している。呼吸状態の観察に必要な胸や、末梢の熱感や冷感について下肢は見えない。清拭では全身清拭をするため〔全身〕〔皮膚〕に、洗髪では〔髪〕に、足浴では〔足〕に視線が集中しているが、清拭では床上動作と合わせて四肢の動きの観察も重要である。また、食事介助では、食物を口に運ぶため〔口〕〔顔〕に、患者役の食事動作に介助を合わせるため〔手〕に視線が集中しているが、安全な食事のためには姿勢にも注意が必要である。おむつ交換では、陰部洗浄し付着した便を洗い流すため〔陰部〕〔便〕に集中しているが、同時に腹部の観察も必要である。このような現状から、学生の視線は手技に応じて見えている部位であり、観察のために見ているとは言えない。また、足浴では【顔】への視線が2要素（38%）と少ないことから、学生の視野は狭く、ケアの部位から遠い部位は見えていない。斉藤ら（2010）は「熟達した看護師は、30秒で患者の広範囲の情報取得が可能である」としている。よって、このようなケアの部位に集中した視野の狭さは学生の特徴である。原因として、基礎看護技術演習中の学生は教員の手技をまねて、手順に沿って一通り行うことに手一杯であることがあげられる。水戸ら（2011）は「看護技術演習中の学生が自身の予想以上に緊張し、初めて使用する物品の扱いに困難を感じている」ことを明らかにしている。今回の結果でも、バイタルサイン、清拭、洗髪では【物品】への視線が2割程度みられ、初めて使用する物品に視線が集中している。また、河本ら（2008）は、「事例を設定した看護技術演習において学生が疾患を踏まえることができていない」と指摘している。本学においても基礎看護技術演習では患者役に病名や患者状態を設定して実施しているが、1年次前期から開講しているため、疾患についての知識は乏しい。そのため、設定した患者状態について疾患を踏まえてイメージできず、何を観察すべきか考えられない状況であると言える。1年次初期の基礎看護技術演習では事例設定せずに、手技や手順の習得を目的とした演習の展開が望ましい。

2. 授業進度に伴う視線の変化

多くの演習から抽出された〔顔〕〔全身〕の中でも、共通して抽出されたラベルは〈顔がほてっていた〉〈顔色が良い〉〈気持ちよさそう〉〈顔をしかめている〉〈ぐったりしていた〉〈くすぐったがっていた〉であった。学生は、顔や全身を見て、顔色や表情、体の動きから患者役の感情や体調を印象としてとらえている。学生の視線は〔顔〕〔全身〕に向いていても、細かな部分ではなく色や動作に変化のある部位に視線が向いているだけで、詳細な観察に至っていない。今回の結果では【顔】への視線をラベル単位で比較し、バイタルサイン測定と冷罨法の演習の間で、わずかな差がみられた。〈顔を横に向けた〉〈顔が温かい〉〈額に発汗あり〉〈一点を見つめている〉など、顔の動きや温度、額の湿潤、目線など細かな部分に視線が向いている。冷罨法の演習では、氷枕を使用する前後にバイタルサイン測定を実施しており、唯一、主な演習内容に前の単元で実施した内容を組み込んでいる。【物品】についてこれらの演習を比較しても、バイタルサイン測定（36要素：23.4%）から、冷罨法（13要素：6.8%）へと減少し、特に〔水銀柱〕はなくなり〔マンシエット〕も1要素と減少した。こ

れらから【物品】への視線が減り、顔への視線が増え、顔の細かな部分に視線が向いたと考えられる。技術の習得について、中村ら（2009）は、「技能が習熟すると作業位置・姿勢が自然なものに変化し、物品の置き方・操作を工夫し、左右の手が連動し、利き手の動線が集約し、所要時間が短縮する」ことを明らかにしている。学生は物品に慣れ、手技を手順に沿って行うことに手一杯にならなければ患者役について細かな観察ができる可能性がある。援助中の観察を指導する場合、学生が物品の取り扱いに慣れ、手技や手順を一通り習得した後が望ましい。授業進度に合わせて事例設定し、既習の基礎看護技術を組み合わせた演習を通して、観察を学ぶ授業が必要と考える。

VI. 結論

看護技術演習中、看護師役の学生の視線はケアの部位と顔に集中し、視野は狭く、ケアの部位から遠い部位は見えていなかった。視線が〔顔〕〔全身〕に向いていても、細かな部分ではなく色や動きに変化のある部位に視線が向いていた。初めて使用する物品の扱いに困難を感じ、教員の手技をまねて、手順に沿って一通り行うことに手一杯である様子が伺えた。学生は物品に慣れ、手順に沿って援助を行うことができれば、患者役について細かな観察ができる可能性がある。授業進度に合わせて事例設定し、既習の基礎看護技術を組み合わせた演習を通して、観察を学ぶ授業が必要と考える。

VII. おわりに

今回の研究では、学生が記載した演習記録の客観的情報の内容を、学生の視線としてとらえて数値化した。そのため、実際の視線と異なる部分があり、量については視線の数で、演習中に学生が実際にその部位を見ていた時間とは異なる。

演習中の学生は、手順に沿って手技を行うことに意識が集中しているため、援助を通して患者を観察する具体的な教育プログラムについては今後の課題となる。

文献

- 1) 河本幸子, 齋藤雅子, 黒崎美由紀, 他: 看護学生の基礎看護技術教育にイメージ事例を組み入れる試み, 岡山済生会総合病院雑誌, 40, 30-32, 2008.
- 2) 齋藤桂子, 浜中美苗, 米倉弘子, 他: 新人看護師と経験者の観察へ影響する要因－観力向上を目指して－, 日本看護学会論文集（総合看護）, 40, 342-344, 2010.
- 3) 斉藤リカ, 松田ひとみ: 高齢者モデルを観察する看護者の特徴, 高齢者ケアリング学研究会誌, 1 (1), 18-28, 2010.
- 4) 中村昌子: 基礎看護技術における「浣腸」と「導尿」の技能習熟前後の動作分析, 日本看護技術学会誌, 8 (3), 84-90, 2009.
- 5) 長谷川真美, 村上弘之, 菅沼澄江, 他: 「看護覚え書」を用いた初学者の看護観育成のための教育方法の検討, 東都医療大学紀要, 3 (1), 12-20, 2013.
- 6) パトリシア・ベナー, 井部俊子監訳: ベナー看護論 新訳版－初心者から達人へ, 87, 医学書院, 2006.
- 7) フロレンス・ナイチンゲール, 湯楨ます, 薄井担子, 小玉香津子他訳: 看護覚え書（第7版）,

210, 現代社, 2011.

- 8) 水戸裕子, 大石朋子, 小山真理子, 他: 模擬患者を用いた看護技術演習における看護学生の「想定外」の経験, 神奈川県立保健福祉大学誌, 8 (1), 73-79, 2011.